特別審査員　講評

アナウンス部門：菊池　秀之　様（日本工学院講師）

　厳しい環境の中で、よく練習しているなと感心しました。声がよく出ていいて聞き取りやすいアナウンスが多かったと思います。
　気になったのは、滑舌と間です。
　一息で読む量が多いと滑舌が甘くなってしまいます。工夫すれば読む量を減らせると思います。間はナゼ必要なのかを考えてください。”ここで1,2”と間をとる、といった感じで意味を感じさせない間が多い気がします。
　「何だと思いますか？」という問いかけの余韻を残した考える間がとれると良いと思います。

アナウンス部門：加藤　直裕　様（FMヨコハマ）

　今年は練習すること、話題を見つけることがたいへん難しかったと思います。それでも日頃の成果をみなさん充分に発揮できていたのではないかと思います。
　その中で１つだけ次回に活かしてほしいことがあります。大事なことは「伝えること」です。伝えるとは「聞いてもらう人に理解してもらうこと」だと僕は思います。
　1分30秒という尺におさめるため、早口になっていませんか？テンポが途中で変わっていませんか？ひとつひとつの発声がおろそかになってませんか？尺に合わせるために、もっと良い表現、自分が伝えたいことを的確に表せる言葉、文章を探すことも大事なことです。
　「伝える」ためにできることを、模倣すること、創造すること、人に聞いてもらうこと、自分の文章を見つめ直すこと、そして何より「練習すること！」を徹底して下さい。
　皆様の益々の成長を祈念しています。

朗読部門：秋元　紀子　様（朗読家、演劇・朗読講師）

　学校で皆と一緒に稽古する時間が限られていたでしょうに、よく頑張ったなぁと感心しています。皆さんの表情や体を見てアドバイスしたかったのでそれが残念に思いました。
　心を動かし、その都度、体も反応し、最後に声が出るわけなので、頭だけで読まないように。声から入らないようにしましょう。言い方になってしまうので。
　心に思ったことを言いたくて、言葉にして言う。
　文章を説明していくのではなく、見たいのは心です。皆さんに共通していたのは、テンポが早かったです。相手（聞き手）の表情を確認しながら話を勧めてみましょう。
　「秋元紀子」で検索すると、Twitterが出ます。朗読や演技について日々つぶやいているのでよかったら見てください。
　noteにも朗読について詳しく書いていますので読んでみてください。

　最後に、2020年12月4日（金）14:00～　横浜ゲーテ座にて「秋元紀子ひとり語り」の公演があります。配信は２週間見られます。よかったら、見てくださいね。

朗読部門：熊谷　ニーナ　様（日本工学院講師）

　コロナ禍の中の本大会、まずは関わった皆様お疲れ様でした！
　今回音声のみの選考は本当に難しかったです!！
　音声的な条件の違いも「気にしない」と思いつつ、やはり内容が入ってこない理由の一つにもなっていたと思います。
　表情や発声法も「生」でしかつかめない…。
　とはいえ、やはり学校名・名前・タイトル等、届ける人のイメージがある方が、やはり聞き手の私には受け取れた気がします。
　今後またライブでない大会だとしたら…
　”何回も録り治せる強み”を最大限生かすのも手だと思います。
　「誰に」「何を」伝えないのか？
　もっと読み込み、自分の声をスマホなどにも録音して聞き直したり、イメージをしっかり持ち、客観的に自分の声や表現をたしかめてください。
　自分の声ももっともっと好きになってください。
　心を動かすことをもっともっとしてみてください。
　表現はまっすぐでも、抑揚をつけなくてもきっと届きます！
　今回もフレッシュさをありがとうございました！

　今回、読みに表情が乏しく(音声だけですから難しい)
　特に、ら行、さ行が気になりました

　マスクをした生活に慣れると滑舌も表情筋も衰えます‼

　普段から舌の体操や、また、マスクを一度外して、お互い笑顔になってからお稽古に入ってみて下さい。
　豊かな心で表現できると思います。

オーディオピクチャー部門：遊馬　秀樹　様（テレビ神奈川）

　参加者みなさんがそれぞれ、様々な工夫をして、見る人にいかに印象づけるかを懸命に考えて、作品と向き合っていることに感銘を受けました。
　その上で、更に上達するための助言ですが、１つは人の作品をたくさん見ること。そして「イイな」と思った手法をまねしてみることです。また、冒頭の部分に力を入れること、です。見る人は、頭の部分で興味を惹かれるか、関心が持てなくなるか決めます。
　コロナ時代、様々な制約がありますが、頑張ってください。

オーディオピクチャー部門：倉林　由男　様（元ラジオ局アナウンサー）

　コロナ時代で放送の部活の日頃の活動も大変でしょうか。
　このようなときこそ、心を静かにして音の世界に耳を澄ませてください。音の世界は豊かです。音の力で人の心を掴み、人の心に入っていき、人の心にありありと「映像」を浮かべることができます。

　出だしが大事です。視聴者を「お客さま」と考えて、人の心を掴むには「音」「現場の音」をうまく使うことが大切です。その意味で今回は「私立青山英和」さんの２つ、「向上高校」さんの２つ、そして「高津」の作品を高く評価します。「出だしから心が入りやすく、テンポよく見やすい」が実現しています。

　そして、この「コロナの時代」を生きる若者として、世の中に訴えたいテーマを表現したい、という点がよく現れている作品についても高く評価しました。「私立相模女子」さんなどです。（でも取材の音がないのはおしい。視聴者の心を掴んだとは言えませんでした。）これからもめげずに取材を続けてください。

　総じて、音の使い方は年々うまくなっています。全国でトップを取るような作品ももっと出てくるのではないかと思っています。

　最後に、コロナ時代を生き抜いてください。そして「音の力」を再確認してください。取材に行ったら「耳をすませ！眼を見はれ！」これを忘れずに。どうぞこれからも「音の世界」を大事に、高校生活を楽しんでください。

ビデオメッセージ部門：佐藤　博昭　様（日本工学院講師）

　おつかれさまでした。
　今期の状況の中で、みなさん苦労されていることがよくわかりました。
　今年しか体験できなかったこと（来年はおさまっているといいですが）を力にかえて、次のステップに進んで下さい。
　今回の映像を観て、感じたことは取材者の主体の重要性です。
　もっと、自分たちが感じたことを信じて、メッセージにしてもいいと思いますよ。

ビデオメッセージ部門：北川　敬一　様（日本工学院講師）

「画面のなかで、高校生の表情が見たい！」

　今回は、12本のみずみずしい映像と、出会うことができました。
　コロナ禍のなか、創作してくれてありがとうございました。
　地域に根ざした映像あり、学校内で収まるよう工夫した映像あり、とても楽しかったです。
　映像のなかの登場人物のほとんどの方がマスク姿だったので、「現在」を感じました。
　全体的に取材をする高校生の姿(インタビュアー)が少ないのも、三密を避けるためなのかなと想像しました。

　マスクをつける必要がなくなったら、
　映像取材を通じて、うれしい、考えこむ、困る、おいしい、まずい、などなどの高校生の豊かな表情を、画面のなかで見たいなあと思いました。
　ナレーションで感想をまとめたり、語るより、
　きっと、みんなの表情の方がもっといろいろなことが伝わるはずです。
　創作してくれてありがとう。
　また、創り続けて何かを発見してください。
　そして、また会いましょう。
　ありがとうございました。

情報部門：橋本　雅史　様（教育委員会指導主事）

　高校生の皆さん、今年度は、いろいろな場面で、新型コロナウィルス感染症対策の必要に迫られ、これまでの日常生活が大きく様変わりしてしまいました。

　今回の放送情報部門大会についても、例年は会場で皆さんにお会いし、発表を拝見することができると楽しみにしていたのですが、映像資料での審査になってしまい、大変残念に思います。

　応募くださったみなさんも、例年より活動時間が短かったりなど、大変だったのではないでしょうか。

　さて、そんな状況ではあったと思いますが、「情報」部門として、引き続き、みなさんの主体的な情報の収集・判断・表現・処理・創造、そして受けての状況などを踏まえた発信・伝達　といった、情報活用能力を存分に発揮した取組を期待しています。

情報部門：渡辺　英司　様（神奈川工科大学）

　コロナ禍での新たな取り組みお疲れ様でした。１点お話します。皆さんは今回は発表に力を入れたと思いますが、ぜひ他者の発表を多く見てください。勉強になると思います。